朗読音声のダウンロード
Audio download

★読む前に　Before you read

《多読の読み方》

多読とは、とてもやさしい本から楽しくたくさん読んで日本語を身につけていく方法です。

次の4つのルールを守って楽しく読みましょう。

1. やさしいレベルから読む
2. 辞書を引かないで読む
3. わからないところは、とばして読む
4. 進まなくなったら、他の本を読む

《How to do Tadoku》

Tadoku recommends that everyone should start with very easy books and enjoy a lot of them following the 'Four Golden Rules' below.

1. Start from scratch.
2. Don’t use a dictionary.
3. Skip over difficult words, phrases and passages.
4. When the going gets tough, quit the book and pick up another.

LEVEL 4 Web Tadoku Books

アリババと40人の泥棒

～『アラビアン・ナイト』より～

昔、ペルシャのある町に二人の兄弟が住んでいました。兄の名前はカシム、弟の名前はアリババでした。父親が早く死んでしまったので、二人はとても貧乏でした。毎日、森へ行って木をとってきて、売って暮らしていました。

でも、兄のカシムは、お金持ちの家の娘と結婚しました。だから、働かないで、毎日遊んで暮らすようになりました。

弟のアリババは、貧乏な家の娘と結婚しました。真面目に一生懸命働いて、貧乏でも楽しく暮らしていました。

ある日、アリババは森で木を切っていました。疲れたので休んでいると、遠くの方から何か音が聞こえてきます。よく聞くと、たくさんの馬が走ってくる音のようです。

――ずいぶんたくさんの馬だ。何だろう――

怖くなったアリババは、ロバを木の後ろに隠して木に登りました。

アリババが木に登ったとき、たくさんの男たちが馬に乗って走ってきました。男たちはみんな色が黒く、目がぎらぎら光って怖い顔でした。

――泥棒だ！――

と、アリババは思いました。

男たちは、アリババの登った木の下まで来ると、馬から下りました。そして、馬の背中から大きな袋を下ろしました。袋はとても重そうです。袋を肩に担いだ男たちは、木のそばの岩の前に立ちました。全部で四十人います。一番前にいる男が親分のようです。親分が、岩に向かって言いました。

「開け、ゴマ！」

すると、ゴロゴロと音がして、大きな岩が真ん中から割れて、戸のように両側に開きました。

――あ！――

アリババは、とてもびっくりして声を出しそうになりました。

男たちが岩の戸の中へ入っていくと、岩は、また閉まってしまいました。

しばらくすると、またゴロゴロと音がして岩が開きました。男たちが何も入っていない袋を持って出てきました。最後に、親分が岩に向かって言いました。

「閉まれ、ゴマ！」

すると、岩の戸が、またゴロゴロと閉まりました。それから、男たちは、馬でどこかへ行ってしまいました。

アリババは、少し木の上で待ちました。音が聞こえなくなったので、木から下りました。そして、岩の前に立って、さっき男たちが言った言葉を言ってみました。

「開け、ゴマ！」

すると、岩が割れて開きました。アリババはそっと中へ入りました。中に洞穴が続いています。

「うわっ！　これはすごい！」

アリババはびっくりして大声を出しました。洞穴には大きな袋がたくさん置いてあって、どの袋にも宝物や金貨がたくさん入っているのです。アリババは、その袋を六つとって外に出ました。そして、三頭のロバの背中に袋を二つずつ載せて、

「閉まれ、ゴマ！」

と、大声で言いました。岩は閉まりました。アリババは急いで家に帰りました。

アリババの妻は、金貨の入った袋を見て、びっくりして言いました。

「この金貨は、どうしたのですか？」

アリババは森の中で見たことを話しました。すると、妻は喜んで、袋の金貨を「一枚、二枚・・・」と数え始めました。

アリババは言いました。

「一枚一枚数えていたら、何日もかかってしまうよ」

「でも、金貨がどれぐらいあるのか知っていたほうがいいと思いますよ。あ、そうだ。カシム兄さんのところへ行って、大きいカップを借りてきましょう」

妻はそう言うと、兄のカシムの家に、米や麦をはかるカップを借りに行きました。兄の妻はびっくりして、

――アリババの家には、そんなにたくさん米や麦はないのに、カップで何をはかるんだろう――

と思いました。そして、底に油をぬって、カップを貸しました。

アリババの妻は、急いでカップを持って帰って、金貨を数えました。それからまた急いでカップを返しに行きましたが、底に金貨が一枚くっついていたことに気がつきませんでした。

カシムの妻は、底についた金貨を見て驚きました。

――金貨！　アリババの家には金貨がたくさんあるんだ。だからカップではかったんだ――

カシムも、この話を聞いて、とても驚きました。そして、すぐにアリババの家へ出かけて行って言いました。

「おまえは、貧乏だと思っていたのに、いつ金持ちになったんだ？　おまえが金貨をたくさん持っているのはわかっているんだぞ」

アリババは、カシムには金貨のことを言わないつもりでしたが、わかってしまったのでもう仕方がないと思いました。そして、

泥棒にあったことなど全部話してしまいました。「開け、ゴマ」「閉まれ、ゴマ」という言葉も教えてしまいました。

カシムは、すぐに十二頭のロバを連れて、森へ行きました。岩の前に来ると、ロバをそばの木につないでおいて、

「開け、ゴマ」

と言いました。

すぐに岩が割れて開きました。洞穴に入ると、たくさんの金貨や宝物があったので、カシムは大喜びです。大きい袋を二十四個も持って岩の前まで持っていきました。そして、元気よく、

「開け、米！」

と言いました。岩は閉まったままです。

――あれ？おかしいな――

カシムは次に、

「開け、豆！」

と言ってみました。でも岩は開きません。

――え、どうしよう！――

「開け、麦」「開け、粟」など色々言ってみましたが、やっぱりだめでした。どうしても「ゴマ」が思い出せませんでした。

そこへ泥棒たちが馬に乗って帰ってきました。親分が、

「開け、ゴマ」

と言うと、すぐにゴロゴロと洞穴の岩が開きました。すると、そこにカシムが立

っていました。足元には、金貨の入った袋がたくさんあります。泥棒たちは、たいへん怒って、カシムを斬り殺してしまいました。

カシムの妻は、夜になってもカシムが帰ってこないのでとても心配になって、アリババに、「カシムを探してほしい」と言いました。

アリババは次の日の朝早く、ロバを連れて森へ行きました。あの岩のところへ来ると、

「開け、ゴマ」

と言いました。そして、岩の中を見て、びっくりして倒れそうになりました。兄のカシムが死んでいたからです。顔中、傷だらけです。アリババは泣きながら、

カシムの体をロバに載せて、カシムの家へ行きました。

カシムの家の戸を叩くと、女中のモルジアナが出てきました。一番頭がいい女中です。アリババは、モルジアナに小さな声で言いました。

「よく聞きなさい。おまえのご主人さまは、泥棒に殺されてしまったんだよ。でも、このことはだれも知らない。立派な葬式を出してやりたいが、顔の傷を他の人に見られたら困る。どうしたらいいか考えてくれ」

モルジアナは、近所の人たちに、カシムが急に病気で死んだと話してから遠くの町の靴屋に行きました。そして、靴屋のおじいさんに、

「針と糸を持って一緒に来てください。お金をたくさんあげますから」

と言いました。そして、

「これは、だれにも知られたくない仕事なので、悪いけれど目隠しをしますよ」

と言って、おじいさんに目隠しをして、手を引いて家まで連れて帰りました。

モルジアナは家まで来ると、靴屋のおじいさんに、

「ご主人の顔の傷をきれいに縫い合わせてください」

と言いました。

靴屋はカシムの傷をとても上手に縫い合わせました。モルジアナは、おじいさんに金貨をたくさんあげて、また目隠しをして、おじいさんの店まで連れて行きました。

アリババは、立派なお葬式を出すことができました。だれもカシムが泥棒に殺されたとは思いませんでした。

それから、アリババと妻はカシムの家に引っ越して、みんなで暮らすことになりました。

その後、泥棒たちはどうしたでしょうか。

あの森の洞穴に帰ってきた泥棒たちは、カシムの体がなくなっているのに気がつきました。怒った親分が言いました。

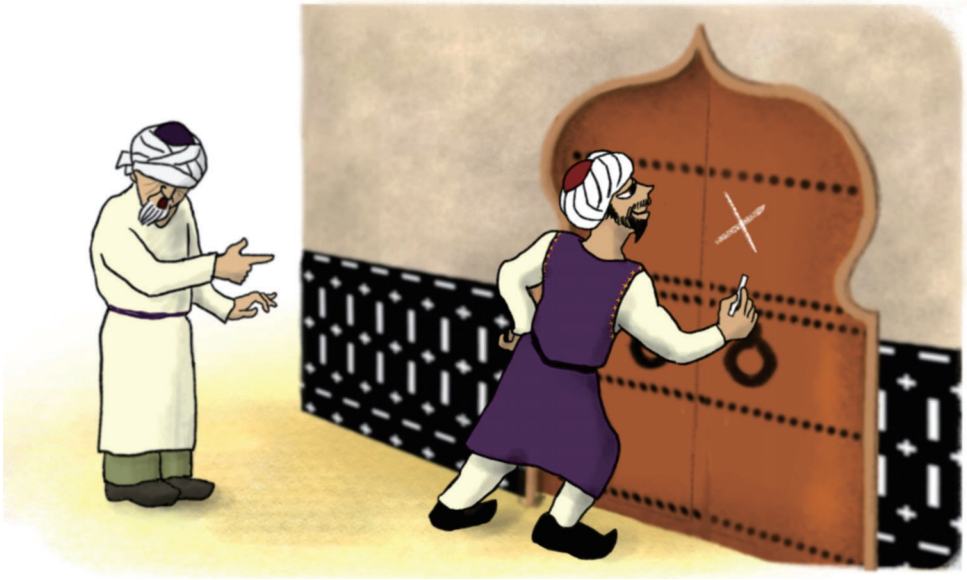
「この場所を知っている者が他にもいるんだな。すぐにそいつを見つけなければ！」

泥棒の一人が言いました。

「私が町へ行って調べてきます」

その泥棒は、朝早く町へ行きました。外はまだ暗くて店はどこも閉まっていましたが、一軒だけ開いている店がありました。あの靴屋です。靴屋では、

あのおじいさんが靴を作っています。
泥棒は店に入って言いました。
「おはよう、おじいさん。朝早くからよく働きますね。でも、暗いからよく見えないでしょう？」
すると、おじいさんは言いました。
「いいえ、よく見えますよ。私の目は、まだまだ若い者にも負けません。昨日も、殺された男の顔の傷を縫い合わせたんです。どこを縫ったのかわからないくらい上手に縫ったんですよ」
「えっ、それは本当ですか？　それはどこのだれなんです？」
「それが、私にもわからないんですよ。目隠しをされて、その家に連れて行かれたんでね」
泥棒は、ちょっと考えてから、金貨をおじいさんの手に載せて言いました。



「それでは、あなたにもう一度目隠しをしましょう。私が手を引いて歩きますから、その家の前だと思ったら教えてください」
靴屋は、目隠しをされて、手を引かれて歩きました。そして、カシムの家の前で止まって言いました。
「ここだったと思います」
泥棒は、チョークでカシムの家の戸に白い「×」をつけて、大喜びで森に帰っていきました。
しばらくすると、買い物に行っていたモルジアナが帰ってきました。戸に×が書いて

あります。

――これは何？　だれが書いたんでしょう？　このままにしていたら、きっとご主人様によくないことが起きるわ――

そう考えたモルジアナは、近所の家の戸全部に×を書きました。

その夜、泥棒たちは、戸に×が書いてある家を探してやってきました。しかし、町まで来ると、どの家にも×が書いてあります。どの家に行ったらいいのかわからなくなって、仕方なく泥棒たちは森へ帰りました。

怒った親分は、カシムの家に×をつけた泥棒を殺してしまいました。そして、今度は自分で町へ行きました。靴屋のおじいさんにカシムの家まで案内してもらいました。親分は、戸に何も書かないで、カシムの家をよく見て覚えました。それから森へ帰って、ロバ二十頭と瓶を三十九個用意しました。一つの瓶に油をたくさん入れて、三十八個の瓶には、三十八人の泥棒が一人ずつ入りました。親分は、瓶を載せたロバを引いて、その日の夕方、また町へ行きました。

カシムの家の前まで来ると、家の前にアリババがいました。泥棒の親分は言いました。

「こんばんは。私は遠くから来た油売りです。この町は初めて来たので、どこに泊まったらよいかわかりません。今晩だけ泊めていただけませんか？」

親切なアリババは、

「どうぞどうぞ。さあ、入ってください。瓶は庭に置いてください」
と言いました。
親分は、ロバの背中から瓶を下ろして、庭に置きました。そして、中にいる泥棒たち一人一人に言いました。
「おれが、夜、庭へ小石を投げたら、瓶から出て来るんだぞ」
台所では、モルジアナが忙しく夕食の準備をしていました。ところが、そのとき、ランプが消えてしまいました。油がなくなったのです。そこで、モルジアナは中庭

へ出てきて、油を少しだけもらおうと思って、瓶のそばまで行きました。すると、中から声がします。
「もう、出てもいいのですか」
モルジアナはびっくりしましたが、すぐに低い声で、
「まだまだ」
と言いました。そして、一つ一つの瓶のそばに行って同じように、
「まだまだ」
と言いました。最後の瓶だけには、本当に油が入っていました。

――油売りというのは、嘘ね。この人たちは、きっと、ご主人様を殺しに来た泥棒だわ――

モルジアナは、最後の瓶から油を取り出して鍋に入れて火の上にかけました。そして熱い油を泥棒たちのいる瓶の中に入れて歩きました。泥棒たちは、みんな死んでしまいました。

夜、みんなが寝ると、泥棒の親分が庭に出てきて小石を投げました。でも、だれも瓶から出てきません。瓶の中を見ると、泥棒たちはみんな死んでいます。驚いた親分は、そのまま走って森へ逃げていきました。

次の日の朝、モルジアナは、アリババを庭へ連れて行って瓶の中を見せました。アリババはびっくりしましたが、モルジアナの説明を聞いて、大変喜びました。

その後、泥棒の親分は、森の洞穴の中で一人で寂しく暮らしていました。しかし、アリババに仕返ししたい気持ちは、前より強くなりました。しばらくすると、いい考えが浮かびました。親分は、立派な商人の服を着て町へ行き、アリババの家の隣りに店を出しました。そして、アリババにとても親切にしました。

ある日、アリババは、家にその商人を招待しました。商人が、アリババの家に来ました。

モルジアナは、商人に料理を運びながら、顔をよく見ました。

――あっ、この人は泥棒の親分だわ！――

立派な服を着ていますが、しばらく前に、油売りになって来た泥棒の親分に間違いありません。それに、よく見ると袖の中にナイフを隠しています。

モルジアナは、自分の部屋に行って、踊りのためのきれいな服に着替えました。

そして、夕食が終わった頃、剣を持って、みんなの前に出て踊り始めました。とても上手に踊るので、みんな大喜びです。だれも、モルジアナの持っている剣が本当の剣だとは思いません。

モルジアナが踊りながら商人の前に来たとき、商人はにこにこ笑いながら財布から金貨を出して、モルジアナの方に投げました。そのときです。モルジアナは手に持っていた剣を商人の胸に突き刺しました。

「モルジアナ、お客様に何をするんだ！」

アリババは、立ち上がって大声を出しました。

しかし、モルジアナは、

「ご主人様、私は、ご主人様を助けたのですよ。これを見てください」

と静かに言って、商人の袖の中のナイフを取り出しました。そして、この商人が本当は泥棒たちの親分だということを説明しました。

アリババはそれを聞くと、泣きながら言いました。

「モルジアナ、ありがとう。本当にありがとう」

それからしばらくして、アリババは、またあの森に行ってみました。森の洞穴は前のままでした。宝物や金貨がまだ山のようにありました。アリババは国で一番の金持ちになり、家族と一緒にいつまでも幸せに暮らしました。

TADOKU Supporters NPO多言語多読

tadoku.org

この作品はクリエイティブ・コモンズ表示–非営利–改変禁止4.0国際ライセンスの下に提供されています。
This book is licensed under CC BY-NC-ND 4.0
https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/

アリババと40人の泥棒

～『アラビアン・ナイト』より～

発行年月日：2023年6月30日

簡約：粟野真紀子

挿絵：池田あきつ

監修：NPO多言語多読

※菊池寛『アラビヤンナイト　三、アリ・ババと四十人のどろぼう』（青空文庫）を基に簡約しました。